

3.2 重度失語症 5 症例の地名人名の理解：予備実験¹

はじめに

Wapner と Gardner(1979)は全失語症者では、一般名詞より地名の理解が良好とした。地名は、固有名詞に属する。固有名詞は、ある特定の対象を指示するための名詞であるが、これには、商品名、球団名、施設名などさまざまなものがある。その中でも、最も身近な固有名詞はわれわれ自身の名前、知人の名前、有名人や歴史的人物の名前などの人名であろう。したがって、安田(1996)は地名のみならず、人名等も同様によく理解できる可能性を示唆した。しかし、一般名詞、地名、人名の理解を比較検討した研究はほとんどない。さらに、それらの固有名詞が聴覚的理解、視覚的理解（読解）などのモダリティーによって理解差を生ずるかなども検討されていない。そこで、予備実験として 4 例の全失語者を含む 5 例の重度失語症者に対し一般名詞、地名および人名の理解力の差を、聴理解と読解モダリティーで比較した。

方法

1. 対象

千葉労災病院で訓練をうけた全失語または重度失語症者で、右利き、左半球損傷者。検査に支障となるほどの重度の失行、失認、保続、注意力障害、聴力視力障害等がないもの 5 例を取り上げた。症例 1；54 才、全失語。症例 2；61 才、全失語。症例 3；61 才、全失語。症例 4；81 才、全失語。症例 5；44 才、超皮質性感覚失語。失語症のタイプ分類は

¹ 本節は、次の論文をもとにした：安田清ら，重度失語症者 5 症例の地名人名の理解，失語症研究，9，(2)，112-117，1989.

Benson(1983)の記述を参考にした。

2. 呈示語と材料

今回は、予備実験のため呈示語や手続き等が症例間で多少異なったものとなったが、概略は以下の通りである。

- 1) 一般名詞：日常の高頻度語で、灰皿、弁当、帽子、電車、靴、眼鏡、布団、鉛筆、人参、牛乳、切符、達磨等である。これらの色付線画カードで表わし、意味的に離れたもの同士を一組とした。
- 2) 地名：各地の都市名で東京、長野、高知、大阪、広島、福岡、仙台、札幌、名古屋、横浜等の都市名を用いた。それらの都市を日本地図上で黒丸で示し、距離的に離れた都市を組み合わせて一組とした。
- 3) 人名：芸能人を主とする各界の著名人で、三波春夫、森繁久弥、加山雄三、森進一、北島三郎、鈴木健二、王貞治、上原謙、北大路欣也等である。いずれも雑誌から切抜いたカラー写真で、検査の際に症例に一枚ずつ呈示し、知っている事をうなずき等から確認しえた人物を取りあげた。

3. 施行法

- 1) カードや地図等を机上に並べた後、一般名詞や人名等を口頭(聴理解)または漢字(読解)で与え、約15秒以内に該当するものを指差させた。
- 2) 一般名詞は一般名詞、地名は地名ごとに、ランダムに検査した。
- 3) 選択肢の数は、各症例の重症度に合わせた(5肢-13肢)。

結果

図7に各カテゴリーの正答率を百分率で示した。症例5の読解は事情により施行出来なかった。本節では、症例間で選択肢の数や方法が、異な

ったため、統計的検討は控えた。しかし、図 7 から明らかなように、読解の正答率の方が、聴理解よりも高い傾向が伺えた。

(図 7 参照)

そこで、全体的な傾向を見るため、便法として各症例の一般名詞、地名、人名のなかで、正答率の高い順から 1、2、3 の順位をつけた。聴理解の平均順位は人名が 1.6、地名が 2.0、一般名詞が 2.4 の順であった。読解の平均順位は人名が 1.1、地名が 2.0、一般名詞が 2.8 の順であり、いずれも人名、ついで地名、そして一般名詞の順となった。人名は読解のほうが聴理解より良好な傾向があった。

考察

全失語症者においては、一般名詞よりも地名の理解が良好に保たれるとした Wapner と Gardner (1979) の方法を検討すると、一般名詞用の情景画の中には選択肢としてなりえる物が、約 20 も描かれている。他方、地名用の合衆国図は白地図のままである。この場合、選択肢の数に関して一般名詞と地名の困難度が同程度という仮定が成り立たない。しかし、本節のような方法からでも地名の良好性は伺われ、Wapner と Gardner (1979) の結果は支持できると思われた。

しかしながら、本節では地名よりも、人名が良好な傾向を見いだした。臨床場面では、簡単な単語さえ理解できない全失語症者が、知人の名前を聞いて急に泣き出すといった現象を経験する。このような現象も今回の結果から説明できるかも知れない。また、Wapner と Gardner (1979) は、聴理解でしか検討していないが、本節では聴理解よりも読解が優れている可能性が得られた。従来より失読のない全失語例も報告されており (Heilman et al., 1979)、文字言語の理解の方が保たれている重度の失

語症例にも遭遇する。訓練の導入順序という点からも、読解モダリティーでの検討も行うべきである。

ところで、実際に地名人名の理解が保たれているとすれば、何故であろうか。まず地名人名の使用頻度については、適切な資料がないが雑誌上の頻度は決して高くない（国語研究所，1962）。例えば「新聞」の使用順位は258番だが、地名の「名古屋」は1574番である。その前後は「特殊」等のやや抽象的な語が占める。このため頻度という観点のみからの説明は無理がある。

次に、WapnerとGardner(1979)は、障害の無い右半球が視覚一空間能力では優位だから、地名も良好としている。顔の認知も、右半球優位(Benton, 1980)であり、顔の認知と関係する人名も右半球で理解できる可能性もある。人名に関する我々の結果もWapnerとGardner(1979)の仮説と矛盾はしない。従来、具体度またはimageabilityが高い語ならば、右半球でも認知できるとする報告があった(Coltheart et al., 1980)。そこで、地名がどの程度具体的でimageableかが問題となるが、そのような観点からの報告はまだない。

一方、人名を刺激語とした報告で、Saffranら(1980)は、健常者においては、人名の認知に左右視野差がみられなかったとしている。Hayら(1982)もSaffranら(1980)の結果を部分的に支持している。これは人名が一般名詞とは違った機序で読まれていることを示し、さらには右半球でも理解できる可能性を示唆したものといえよう。しかし顔の認知課題でも、人名が関与すると左半球が優位になるというMarziら(1974)の指摘がある。このため右半球が、視覚一空間能力が優位だから、地名も右半球で理解できるというWapnerとGardner(1979)の推論は、やや単純であろう。

我々は、地名人名は固有名詞に含まれるという観点から、本節の人名と地名の良好性を考えた。三宅(1972)によれば、固有名詞の役割は、意味の無いレッテルといわれるように、ある特定のものを直接指示することである。そのため一般名詞のように、物と名前間に意味が介在しない。例えば、一般名詞の「家」は「人間の住む建物」という意味で、通常は使用されなければならないが、固有名詞の「太郎」は、直接にあるものを示すために使われ、それが人や犬であっても許される。

このため意味の理解障害が強い全失語症者では、一般名詞の理解が困難になるが、固有名詞である地名人名は、意味の介在がすくないため比較的保存されたのではないかと考えた。Endoら(1981)は外国語の学習初期、意味の理解があまりできない段階では、右半球の活動が高いとしている。このため筆者は、意味の介在度が少ない語は右半球でも理解できるのではないかと推測した。

本節で、人名の理解が地名よりも良好な可能性を示したが、それは人名がより指示対象の範囲が限定しているからではないだろうか。例えば、「北島三郎」は唯一の存在だが、「東京」はその中に「新宿」等の下位分類を含む。それだけ指示対象の範囲が広く、人名よりも難しくなると考察した。

まとめ

予備実験として4例の全失語を含む5例の重度失語症者について、一般名詞、地名、及び人名の理解の差を聴理解と読解で比較した。結果は、一般名詞よりも地名が良好だとするWapnerとGardner(1979)と同様であった。しかし、地名以上に人名の理解がより良い傾向を新たに示唆した。また聴理解よりも読解がより良好な傾向も見出した。その原因について

は、地名人名は、固有名詞に含まれるため、意味の介在が少なく、そのため一般名詞よりもよく理解されたものと考察した。